KARIBIB の回想

2023 年度１次隊/数学教育/渡辺 崇人　　2024 年 11 月 29 日　Vol.20（番外編）

【後編】

前回の Vol.19 に引き続き、マダガスカル編です。今回は体験したこと、また実際に訪れて感動したことを紹介します。

１．木彫りのオリジナルスタンプを作ってもらった

写真１：独立広場から大階段を見下ろすように撮ったもの

写真２：完成したスタンプ（写真は反転しています）

首都アンタナナリボには独立広場という名所の一つがあり、その下には通称「大階段」と呼ばれる、露店が左右に所狭しと並んだ階段が続あります（写真１）。その露店の一つに、好きな写真を持っていけば１時間ほどで木にスタンプを彫ってくれるスタンプ屋さんがあり、実際に彫ってもらいました（写真２）。値段は１つ 1,000 円ほど（交渉が上手ければ、もっと値下げができると思います）。このお店では、日本の芸能人も同じように発注しているせいか、完成例として日本人の名前を数多く見るほど、日本人の間では有名なお店の一つです。

２．料理のクオリティがすごい

写真３：フランスパン

写真４：フランス料理

写真５：海鮮串とお魚

Vol.19 でも多少触れましたが、この国の料理は何をとっても外れがありませんでした。旧フランス領であるためもちろんフランスパンやフランス料理は口にすることができます（写真３，４）。また日本のように島国であるため、海鮮も種類が豊富です（写真５）。

写真６：お粥（バリスス）と牛肉

写真７：豚骨ラーメン

写真８：バオバブアイス

そしてこの国は主食が米であり、一人当たりの年間の米消費量が 100kg（FAO, 2017 年）と日本人の約２倍の値をもち、自給率も 90%を超えるほどの超がつく米大国です。そのため、日本人には嬉しいことに、この遠いアフリカでもお粥を口にすることができます（写真６）。こちらのお粥は、粥だけで食べられるほどの程よい塩加減でした。加えて驚いたことに、首都では豚骨ラーメンも食べることができました（写真７）。それも海外でよくある“なんちゃってラーメン”ではなく、正真正銘の日本のラーメン店のものです。そのため味付けは日本で食べていたものと遜色なく、どこか懐かしさを覚えました。最後に写真８はバオバブの実から作ったバオバブアイスです。もちろん初めてで、味は Amalura という甘いお酒に砂糖を足したような、相当甘いものでした。

３．マダガスカルオリジナル商品？ との出会い

写真９：カカ・ビジョン

この国では、独自の進化を遂げたのは生物以外にも商品もおそらくそうで、同国オリジナル？のものをいくつか発見しました。その一つがカカ・ビジョンです（写真９）。直訳すると「鳩の糞」と何とも食欲をそそるような名前になりますが、味はメジャーな塩以外にもチーズやピザ等いくつか種類があり、油で揚げた少しサクッとした食感のおつまみで、安価で手に入るため滞在中は気付いたら食べていました。

写真 10 は見た目はコカ・コーラ。気になる味もコカ・コーラ。だけどラベルはワールド・コーラ。不思議な飲料でした。

そしてこの旅で最も衝撃を受けたことは、とあるビールとの出会いです。それが Fresh（写真 11）。僕はものすご～く下戸で、特にビールなんかはおちょこ１杯でも十分なほど、あまり飲めない酒類になります。そのため飲み会では、いつもビールを美味しく飲んでいる人を横目に羨んでいま

写真 10：ワールドコーラ

写真 11：
奇跡のビール Fresh

した。これまで、本当に多くの心優しき方々に「これなら飲めるよ」と色々なビールを勧めていただき、確かに熟知していらっしゃる方が勧めるだけあって、その時は珍しく美味しいと感じるのですが、それでも“ジョッキー杯は要らないかな”と全部は飲み切れずにいました。ところが、このFreshはどうでしょう。初めて飲んで、初めて１瓶空けることができたのです。その時は直輸入を本気で考えたほどこの旅一番の衝撃の出会いでした。味はフルーティーで僕が飲める位ですから相当飲みやすいです。もはやジュースです。気になる方は是非、現地で試してみてください。

４．現地の方との交流

写真 12：首都のゲストハウスでの夕食

首都では、隊員御用達のゲストハウスに宿泊させていただきました。夕食はせっかくなのでオーナーご家族とお手伝いさんと一緒に取りました（写真 12）。オーナーはJICAとは古くからのお付き合いだそうで、我々の事情をよくご存じでした。また我々の朝食用のパンの購入のために、凍てつく寒さの朝５時にバイクで市場まで行ってくださる優しい方でした。奥様は英語もご堪能だったため、マダガスカルの一般家庭のことやご家族のことなどをお話ししてくださいました。

夕食中はずっと音楽が流れており、娘三人がずっと踊りを披露していましたが、これまで紹介してきたアフリカのどの国との曲調とも異なり、これが島国であることに起因するのか、旧植民地が異なることに起因するのか分かりませんでしたが、独特な印象を受けました。現地の方とのここまでの交流は、同国の隊員の力添えがあって初めて実現できたため、貴重な機会をもらえ、非常にありがたかったです。

５．野生のキツネザルとの出会い

写真 13：ムルンダバのゲストハウスで

今や絶滅危惧種のキツネザル。マダガスカル固有の野生動物と聞いて、真っ先に思い浮かべる人も多いのではないでしょうか。ムルンダバ（首都から飛行機で２時間ほど西に行った、バオバブ街道のある都市。Vol.19 参照。）のとあるゲストハウスでは、そんな野生のキツネザルと追加のプランで触れ合うことができました。当日申し込んでスタッフにお支払いすると、その方が「アッ、アッ」と鳴き始め、その光景に「初めてのタイプの課金制だ。。」と目を丸くしていたところ、遠くから「アッ、アッ」とおじさんのような声がこだまし、気付いたら野生のキツネザル 20 匹ほどに囲まれていました（この方凄い！）。キツネザルは写真 13 のようなチャーミングな見た目と、両腕を上げて２本の足でジャンプするように動き回る可愛い仕草が特徴のおサルさんですが、その

愛くるしい姿とは裏腹に、鳴き声は誰かが別で吹き込んでいるのではと思うほど渋いおじさんのような音を出します。聞いたところによると、住処は 20km 程離れているようですが、日が昇っている間に近くに来て、沈むころにまた帰るとのこと。当国には全部で 107 種類のキツネザルが確認されているようですが、この日はそのうち３種類に出会えました。ただ、野生のものにここまで近づける場所は世界でもあまりないのではないかと思います。そのため、囲まれている間はペットにできたらなと思うほど本当に興奮していました。去った時に、服が何か臭う液体で濡れていたことに気付くまでは…。

６．念願のバオバブと日本人旅行者との偶然の出会い

写真１４：夕日とバオバブ

写真１５：朝日とバオバブ

写真１６：日本人旅行者達と

小説『星の王子さま』で出会ってから、バオバブはずっと実物を見てみたいと憧れがありました。この日、ようやく長年の夢が叶い、ムルンダバのバオバブ街道で念願のバオバブを見ることができました。全長はおおよそ 20m 程です（写真 14，15）。英語も堪能な現地のガイドさんの話では、マダガスカルには８種類のバオバブが存在しているが、この街道にはそのうち３種類があるとのこと。樹齢は千年を超え、どれも幹が太く、真っ直ぐでした。また、街道でたまたま声をかけたのが、それぞれ単独で旅行をしていた日本人２人で、しかも１人は JICA ナミビア隊員の知人とのことで「世界は狭いですね～」なんて話をしていました。そこに、その日本人旅行者と同じ首都のゲストハウスに宿泊していたアメリカ人と台湾人の旅行者にこれもまた偶然再開し、大盛り上がりしていました（写真 16）。その後、日本人旅行者と夕食を共にし、アフリカの島国で偶然出会った人たちと日本語で会話が盛り上がっているという予想だにしない状況が起こり、驚きました。

７．色々な人の優しさに触れたこと

首都のゲストハウスのご家族はもちろん皆優しかったですが、ムルンダバのツアーのガイドさんも時間を厳守してくださる方で、またご厚意からプランにはないバオバブの御神木訪問や牛乗り体験ができ、最後にはお土産まで渡してくださる優しい方で、忘れることのない思い出ができました。また、実は旅の後半はずっと体調を崩しており、帰りの空港でぐったりしていた所、それを見かねたからか日本人のご家族が「よかったら」とバファリンをくださり、だいぶ救われました。今回は行く先々で色々な方と出会い、それぞれの方の優しさに触れられたことが何より忘れられない旅になりました。

次回：2024 年の活動の様子に戻ります！